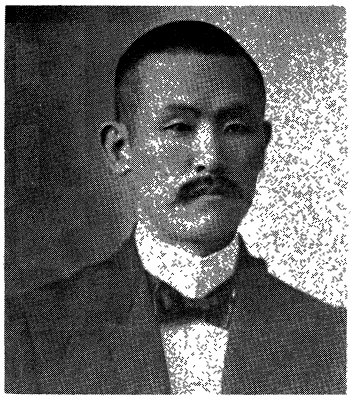
一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　100円
㈱橋本清文堂

二代校長 野田藤馬と校訓

旧金沢一中では明治三十年十一月、初代富田輝象校長のあとをついで野田藤馬校長が着任した。初代富田校長、三代、久田校長が共に加賀藩士の家に生れ、藩学明倫堂に学び、新旧二つの思潮の交錯する激動の明治初年にその青年期を過し、金沢士族の気概を持ち伝えた点で共通するところが多かった。



（野田藤馬校長）

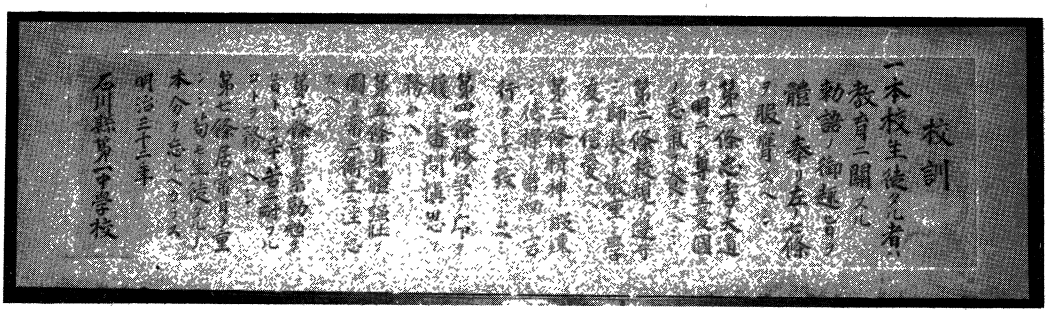
二代目野田藤馬校長は野人的な富田校長とは対象的に当時、最高の官僚養成機関とも云うべき帝国大学に学んだと云う学歴の相違や、一方が民権運動から地方官僚に転じたのに対し中央の内務官僚として過して来た経歴の違い等から、この新校長の着任によって当然、画一的な教育制度への順化、統制が予想された。

野田校長は当時、藩学・私塾的な風潮の尚温存する学校を近代的な内容を具えた国家主義的教育制度を注入し国の要請する規格、規制に即応させることに傾注した。

校長在職期間は二年足らずであったが、この間に於ける諸制度の整備は極めて著しいものがあった。

その具体例としては校訓・校旗の制定につづき基本的教育理念の確立、制服強制や禁煙令の生徒に対する統制の強化、校友会の設立による生徒の課外活動の組織化などがある。

開校後六年間、制定のなかった校訓は明治三十二年五月、野田校長によって成文化された。



（昭和五十六年修復なった扁額）

その全文は次の通りである。

本校生徒タル者ハ教育ニ関スル勅語ノ御趣旨ヲ体シ奉リ左ノ七条ヲ服膺スヘシ

第一条　忠孝ノ大道ヲ明カニシ尊皇愛国ノ志気ヲ養フヘシ。

第二条　校規ヲ遵守シ師長ヲ敬重シ学友ヲ信愛スヘシ。

第三条　精神ヲ鍛練シ徳操ヲ磨励シ言行ヲシテ一致セシムヘシ。

第四条　修学ノ序ヲ履ミ審問慎思ヲ努ムヘシ。

第五条　身体ノ強壮ヲ図リ常ニ衛生ニ注意スヘシ。

第六条　質素勤勉ヲ旨トシ辛苦ニ耐フルコトヲ務ムヘシ。

第七条　居常自ラ重ニシ苟モ生徒タルノ本分ヲ忘ルヘカラス。

この校訓は教育勅語の趣旨に沿って忠君愛国の義務観の育成を絶対的な目標として掲げるとともに質実剛健の気風を強調したものであり、その後時代的風潮の変化を反映して様々に肉付けされてはいるものの、その基本的理念は変更されることなく維持され、太平洋戦争終了までの半世紀、旧金沢一中の精神的支柱として守り伝えられた。

（この資料は同窓会所蔵の文献より）

「一泉」第七号によせて

泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて (4)

（続）CHUSHINGURA（忠臣蔵）

山森青硯（一中二十三回卒）

NHKドラマ「峠の群像」には室鳩巣は出て来なかった。先日は荻生徂徠（護園）のみが所載されていた。

兎に角当時は徂徠学派と鳩巣学派がことごとく隔絶があり、特に鳩巣の徂徠嫌いが濃厚に現われていたのは事実であった。鳩巣が徂徠「李王祖述」を大いに罵しり

今世師儒と称して、法を孔子に誦すといへど、実は名聞をつとめて、つゆ道に志なければ、二百載の下（中略）今師といひ、弟子といふもの群居して文談ずるを聞くに、口に任せて大言し、道を語れば程朱を排し、文を論ずれば韓欧を貶し、自から牛耳を執て、一世人なき様に云へるこそ、昔の攀竜、世貞が会に髣髴しけれ。よく其伝を継たるといふべし。（駿台雑話）

とある。即ち徂徠学派を大言壮語の学徒であると痛快に罵倒している。それでも徂徠学派は一世を風靡していた。鳩巣は左の如き詩を詠じていた。

宇宙依然百化流。
道喪文弊思悠悠。
誰知天上孤輪月。
長照人間萬古愁。

道喪は、文弊る、と云うのは徂徠学派を云うのである。鳩巣が死に瀕して（鳩巣享保十九年七十七才歿）尚右記作詩あるいは如何に徂徠学が、当時繁昌していたかを雄弁に物語るものと云えよう。昭和七年十一月六日漢学者市村瓚次郎先生が、金沢孔子会の招きで於四高で講演された。其の中に左記の言があった。

山崎派の方では闇斎門下の佐藤直方の如き、護園派の方では徂徠の門下の太宰春台の如き、皆此の赤穂諸士の行動を非認して、之は全く義挙と認むべきものでないと云うことを痛論している。今一々その議論を紹介する事は出来ませんが、佐藤直方は浅野長矩が吉良上野介を殿中において抜討ちにしやうとした其の行動は、国法を犯したものである。これに切腹を命じたと云う事は当然の理である。これを当然の理としたならば、彼の赤穂諸士の行動は全く不義の行動である。且吉良は浅野を殺したのではない長矩の死は、国法の処分である。

故に吉良は長矩の讐とすべきにあらず、寧ち国法を仇とすべきものでないか。彼等が泉岳寺に於いて自殺でもしたならば、猶怒すべき所もあるが、それをせずして仙石家へ訴へ出で上命を待つと云ふ事は、万一の際に死を免れ禄を得んとの不心があるのではないか。又吉良邸に討入った其の前後の行動は、権謀術数を免れないという様な議論を吐いて居る。

太宰春台は啻に人臣の義を知らざるのみならずまた此方の士の道たる所以を失うといひ、更に彼れの志や事を済し功を成し以て名利を求むるにあり鄙い哉とさへいうて居る。成程これも一面の見方であろう。

然れども一方に於ては大学頭の林信篤や三宅観瀾等は勿論同じ山崎門下でも浅見絅斎は赤穂諸士の復讐を義挙と認め、彼れ等を義人と認めたが、特に金沢に最も関係のある室鳩巣先生は赤穂義人録を著はし、これらの諸士を義人と認めた。

而してその序文に浅野の家来が吉良の邸へ討入った事を義挙と認めても幕府の行動を非難する意味でないと云うて居ります。

此の義人録と云うものが当時に於いて最歓迎せられ、さうして普通一般に赤穂義士と云う様になって来たのであります。

同じ儒教の系統を受けている学派にして、同じ事件に対する意見が斯の如く黒白を異にし、東西を別にする様な意見の相違の現れて居るのは、如何に義利の問題の解釈が実際余程難しいと云う事を茲に証明して居るものと思うのであります。

それ等の議論を今日から何う云う風に之を見るかと云うと、実際当時吉良上野介は幕府の方面の当路者からもその専横を憎まれて居り、当時の一般人民からも好感を持たれなかった故に浅野の方に同情があった。そこで此の復讐の行為が現はれると、一般の人心は非常に之れに同情し翕然として之を是認する傾きがあったのでありますが、独り学者の間に前述の如き意見の相違があったのであります。

此の両方の意見は果して何れを是とすべきであらうか、私は之を時代の場所即ち環境の上から観察

して見なければならぬと思う。徳川時代は即ち封建の時代であったのみならず、当時一般に復讐の行為を是認して居った。即ち時々各地に於いて復讐が行はれ誰某の復讐、何処の仇討と云う風に世人の注目嘆賞の中心となって居った位であるから、これを是認しなければならないのではないか。設令儒教の経典にある程でなくとも、当時の時代に於いて、社会が復讐の行為を是認しなければならないのであらう。

さればこれをその当時の事物に適合せる所の正しき行為及び裁判とも見る事が出来るのでありまして、私は寧ろ室鳩巣先生の義人録の説に同意を表するものであります。

とある。市村先生は特に金沢に於ける講演であるから、特に鳩巣に軍配を挙げられたのであろうか。我が郷土に於いては、明治四年十一月廿三日本多弥一氏等が岡野悌五郎を刺した所謂「本多家臣の復讐」が、日本復讐史の最後となった。即ち我が太政官は明治六年二月七日布達第三十七号に依って復讐を厳禁した。

按うに、元禄赤穂義士の復讐を義挙と決めたのも金沢、復讐を禁ずる太政官布達を決定せしめたのも金沢、金沢と復讐は寔とに不思議な因縁と言わねばならぬ。

徳川吉宗は大いに学者の言を入れた人であった。然かも学者偏用を去けられた。

琉球の程順則と云う人から我邦に伝へた書に「六諭衍義」と云う書があった。幕府は荻生徂徠に同書訓点を附せしめて刊行し、更らに室鳩巣に其の大意を、日本假名交り文に綴りで刊行せしめた。徂徠の訓点本は享保六年（一七二一）辛丑十月十一日付、鳩巣の「六諭衍義大意」は享保七年（一七二二）壬寅二月廿五日刊行された。両書の距り約半年であった。

泉丘校に左記書がある。（解題目録一七六頁参照）

「官刻」六諭衍義　清范鋐註釈
一冊　七三丁　和装
二七・五×一八・五　ケース入」

六諭と云うのは、第一父母に孝、第二長上を敬、第三郷里は睦、第四子孫に訓、第五生理に安、第六非為を不作であり、第五の生理とは職業の事である。（本書は明治倫理の骨幹となった）前述吉宗は六諭衍義大意を邦文に訳することを鳩巣に命じたが出来上り原稿を調査すると、余り長文で、改訂せよと命じた。鳩巣曰く

六諭衍義かなに和らげ、上中下三冊に仕立指上候処に、四五日過候て、被仰出候は、書の仕立宜敷被思召候。然共思召には、是より短く被成度上候は、一段の紙数七十程も有之候。一段を三枚位につめ可申、左候はゞ、文意達しがたく可有之候間、只今の様に感情うつり申間敷被思召候。（中略）

父母に孝行の一段短く仕直し、先さし上候処に、二三日前兵庫殿よりよびに参候て登城候処、一段宜敷候間此通り不残仕立候様にと被仰出只今宅にて取懸り罷在候。けっく最前くはしく致し候より六ヶ敷御座候（兼山麗沢秘策）

とある。是は鳩巣本書短かにするを不可とし、これを言上したが聞き入れられず、ここにも鳩巣徂徠確執の情が窺われる。鳩巣書翰に徂徠忌避文を筆者屢々見るのである。吉宗短文書替を気の毒に思ひ、再び享保八年（一七二三）教化書としての「五常五倫名義　一冊」の編纂を鳩巣に命じている。「先日五常五倫の假名書被仰付候。後日は板にも罷成、後世へも伝り可申候処、いつ出来候哉。誰が所作に候哉」と云っている。

本書印刷成ったのは鳩巣歿後三十年、宝暦八年（一七五八）加州金沢観音町塩屋与三兵衛板であった。同九年は金沢最大の大火があり、版本板木悉皆烏有にきし、本書残本無く、珍本中の珍本と云えよう。

柴野和喜夫同窓会顧問逝去

元石川県知事、元参議院議員の柴野和喜夫一泉同窓会顧問が去る十二月十八日肝硬変のため死去。

同氏は旧金沢一中第二十七回の卒業生であり、四高、東大法を経て昭和二年農林省に入り滋賀県知事から二十二年公選初の石川県知事に二期、三十三年参議院議員石川地方区補選に当選し国政に参与した。現在、弁護士として活躍のかたわら一泉同窓会の顧問として同窓会の発展につくされた。ここにつつしんで哀悼の意を表します。

同窓の随想

恩師久田校長

山本光政（一中一七回卒）

拝啓　毎回貴校友会誌「一泉」御恵贈にあずかり有難く厚く御礼申し上げます。殊に去る十月一日の一泉を十一月二十日にて受領、その第一頁に恩師久田督先生の「厳霜烈日可畏而仰」の写真像を拝見し感慨無量です。この銅像は私の在学中に建立されたものであり、私は先生には入学早々弓道部に入部し、吉田流大蔵派の弓道達人であられた先生から五ヶ年間親しく弓道を教わりその主将を勤めました外、剣道柔道、マラソンをやり身体と魂（負けじ魂）を鍛錬して貰いましたので、第四高等学校時代、東京帝国大学時代を通じ弓道部主将を勤め、卒業後、社会人になりましても弓道に専念、大日本武徳会、全日本弓道連盟の会員として満八十一年連続弓道に修錬、幾多弓人を育成し為か、去る十月一日付を以て日本武道顕彰保存協会から日本武道功労者として特別表彰「特別有功章」武道勲章を拝授すの栄誉を受けることとなりました。これ偏に久田督校長先生の賜物と深く感謝しています。

また学問の面においても第五学年の時、先生から英語を学んだが或る時、私が予習を怠って授業を受けた。折悪しく指名されましたので頭を下げてお詫びし着席せんとしたところ温顔のなかにも強いお心にて、単語の二三の知らないものがあっても前後の関係と知っている単語でやりなさいと言われたので、勇を起して何とかやり遂げた事は、後日英文独文を読めるようになった。

御蔭で専門学校・大学教授となれたことを常に思い、先生の徳に感謝して今日に至っております。

斯様な次第でこの先生に関する記事は当時を想起し感謝に満ちて読破いたしました。

またこの「一泉」誌全面をのこらず興味深く且つ懐かしく拝見いたしました。有難うございます。

以上所感の一端を申し上げ御礼の御挨拶に代えます。

桜章校の昔を偲びて

太田公秀（第二十五回卒）

昨年末私は一泉同窓会事務局の南秀男氏より「一泉」の第七号への寄稿を依頼された。私は毎号「一泉」の寄贈を受けて居りますのでいつも感謝の念に満ちて居り、金沢一中に対する思慕の情は老いて益々深くなるばかりであったから、母校を偲びつつ駄文を寄することと致しました。

「一泉」の第六号で中堂観恵さんの寄稿を拝見して懐旧の情の切なるものを感じました。中堂さんとは戦前、戦中を通じて真田憲さんや、佐藤賢了さんなどと共によくお会いして陸海軍一中同志の交歓を重ねました。又広瀬豊作元蔵相や、新木元駐米大使などとも一中の誼みで屢々快談を重ねたことが昨日の様に感ぜられます。それら旧知の各先輩が皆故人となられ身辺の寂寥を感じて居た矢先、中堂さんのご健在を「一泉」を通じて承知し感慨一入のものがあった。

さて、私は次に私と一中との因縁について述べることと致します。

私は明治四十四年四月金沢一中に入校した。その年は尋常小学校六年卒業生から中学校に入学出来る最初の年であったと記憶して居るが、我が長町尋常小学校からも県下の名門金沢一中の入学試験を受けた人が尠からずあった。試験の結果水野淳君と小原君と私との三名が入学を許された。水野君は一番で入学し特待生となり前途を大いに嘱望されたが、不幸、学半ばにして病死された。小原君は二年生のとき大阪陸軍地方幼年学校に進み、私は三年生のとき名古屋陸軍地方幼年学校に転じた。私にこの転校がなかったら大正五年三月卒業した筈だから第二十三回卒の待遇を頂戴して居るのである。

当時の金沢一中は本多町に在り、正帽に桜章をかざして居たから桜章校と呼ばれ、生徒には桜章校健児としての誇りと郷党の期待が寄せられて居た。私共の校長は小松倍一先生であったが久田校長以来の校風を受け継がれて居た。学習も厳格であったが武道（剣術と柔道）やスポーツ（野球と水泳）も盛んであった。私はこれらの総べてに興味を持ち技能は何れも水準以上であった。八十四才の今日まで元気で暮らして居るのもこの少年時代に鍛えたことが基礎となって居る。野球は小学校時代投手をして居たが、一中に進んでからは慧星クラブに入り森島守人先輩等と本多町の校庭で盛んに野球をやったものである。当時全国的に頭角を

現わして居た愛知一中が四高の校庭に遠征に来た時代であった。

旧い昔話をすることのみが本稿の目的ではないからこの辺で割愛するが、あれから七十年後の一昨年の年末、同窓の辻繁雄君が突如拙宅を訪問されたのであった。私の驚きと懐しさとは尋常ではなかった。聞けば辻君のご令息が大東亜戦の末期フィリッピンのリンガエン湾で特攻隊に加わって散華されたとのことであった。その英魂が現在東京の世田谷区下馬四丁目に在る世田谷山観音寺内の特攻観音堂に鎮まりまして居られるのである。辻君は観音寺の住職に拙宅を教わって訪ねて来られた次第であった。桜章校の学窓でお別れしてから正に七十年の星霜を経ての再会であった。私はこの感激を「観音さまのお導き」と題して昨年二月発行の「加能人」誌（金沢市長町一―三―九加能人社発行）に寄稿したのでこれをお読みになった方もあろうと思うが、同窓の絆は意外なところで固く結ばれて居るのである。私は辻君から厳霜碑の戦後の状況を聞き又本多町校舎の図面を貰って在りし日の学びの跡を懐かしんだ。

大東亜戦争の末期特攻隊に加わって散華せられた英霊は四、六六二名であったと聞いて居る。これらは何れも神州の不滅を信じ自己を犠牲にして国家のため尽された尊い精神の持主で靖国神社の祭神となって居られるのである。この神様の親たる辻君に接するとき私は自ら頭が下がるのである。そして「神州は遂に不滅であった、英霊よ冀くは安らかに神鎮まりまし給へ」との言葉が自ら出てくるのであった。それは純真な感謝の真心の発露である。

（筆者は元陸軍少将、現在日本金鵄連合会常任副会長で、金沢市出身である。現住所東京都世田谷区下馬六―四四―八）

泉丘校庭の彫刻「逆流」に付いて

押村孫二（大正十一年卒）

昭和三七年頃の或日、故吉野勝太郎先生より御電話があり木村珪二氏当時東京教育大学教授の作品「逆流」に付ての御相談を受けました。それは昭和三十七年日展出品の展覧会が金沢市にても開催あり、金沢市出身の旧一中大正十一年卒業の木村珪二氏の作品「逆流」が市民一般に非常に好評を呼んだ関係上、是非同品を泉丘校庭に建立し度い旨、当時の一泉同窓会長たりし英氏より切なる希望を受け居るも貴殿が右作者木村珪二氏と懇意の由に付何とか努力をと求められました。小生と致しても一泉同窓会長からの懇望とあらばと思い、或日吉野先生を御同伴致し木村氏の自宅隣家にアトリエあり茲に御案内致し、木村氏に右の次第を御願い致しました次第です。木村氏も当時は教育大学教授の栄職時代に付、右の熱意を快諾されて原型を寄附して下さる事となりました。

而して三者協議の結果原型は木村珪二氏寄附、鋳金費は一泉同窓会負担、台座は在東京の大正十一年一中卒業同級会員寄贈とすることと決定して此の主旨や結果を同年秋東京目黒の雅叙園にて開催の関東一泉同窓会の席上に於て発表となりました。

右彫刻の発想は、若々しい緑の如き青年男女が萌える生命のいぶきと匂と美しさにうたれる頃、一方世の中には幾多の山河や苦難の多き事を察知せねばなりません。只若々しい春だけではない事を、是をヒマラヤ登山に例えるか或は又南米アマゾンの大河の流れを変える如き科学の研究を推進する学問と闘い、これに「耐え忍ぶ力」これを象徴したのが右銅像〝逆流〟である事を、木村氏は繰返し物語られました事を本誌上に於て改めて御伝え申上げます。吉野先生も小生もこの木村氏の高潔な精神と努力に対しいたく感動されました訳であります。

彫刻〝逆流〟像

（「参考」―此頃金沢第二高女校（旧）の校庭にも、畝村先生作の右に題する彫刻が出来上った筈と思います。

尚、木村氏と私の関係は私が昭和の初め明治製糖㈱に入社致し、東京・台湾と砂糖の職場を経て同系の明治製菓本郷三丁目角（東大赤門近くの）売店長在職時代、同級生長谷次氏代議士立候補当選した頃、同氏を取り囲む一中同級会がクラス会を右店舗三階のホールにて度々開催されました。三十五人位常に集り歓談を交したものです。又此の建築は、仏の名建築設計家ルコルビジュエ式に依り、設計家前川氏の一等当選、（設計入選）の当時としては斬新な建築であり木村氏も時々小生を尋ねて来訪あり、菓子類の販売店や喫茶室の一角に木村氏の習作、動物ブル

ドックや猫の垣根を通り抜ける姿を彫刻化した作品を装飾的アイデアとして貸して戴いて、一般顧客の人気を呼んだ（東大学生等も多い街に付）ことを覚えて居ります。

金沢中央公園にある彫刻ひさかた「鳩を持った少年」も同氏の作品であることを茲に付記致します。作者の略歴は左記の通りです。

作者略歴

一九〇四（明三七）年　石川県金沢市に陶家友田安清次男として生まれる。
一九二二（大一一）年　石川県金沢第一中学校（現泉丘高校）卒業。故吉田三郎先生を師とし彫塑家を志す。
一九二六（大一五）年　第七回帝展初入選
一九二七（昭　二）年　東京美術学校（現芸術大学）彫刻科本科卒業。第四回白日展、白日賞
一九二九（昭　四）年　第六回白日展、白日賞、会友
一九三三（昭　八）年　白日会会員
一九三五（昭一〇）年　玉成保母養成所（現アルウィン学園玉成高等保育学校）講師、のち理事に就任
一九三六（昭一一）年　第二回文展、特選
一九三七（昭一二）年　第三回文展、特選
一九四一（昭一六）年　第六回文展無鑑査
一九四三（昭一八）年　第六回文展、招待出品（以後日展にいたるまで毎回出品）
一九五二（昭二七）年　東京教育大学教授に就任
一九五五（昭三〇）年　日本美術展（旧日展）審査員
一九五八（昭三三）年　日展評議員に就任
一九五九（昭三四）年　第二回日展審査員
一九六一（昭三六）年　日展出品作「逆流」金沢泉丘高校に寄贈
一九六二（昭三七）年　第三八回白日展、特賞中沢賞
一九六三（昭四三）年　第六回日展審査員
日展出品作「若竹」、東京教育大学に寄贈
一九六八（昭四三）年　金沢中央公園に「ひさかた」像建立
一九七一（昭四六）年　八月三一日、永眠、享年六七歳
従四位勲四等旭日小綬章

Let bygones be bygones

宮川隆泰（一中五十四回）

私どもが一中に入学したのは昭和十七年で、終戦の時が四年生で最上級生であった。当時は戦時特で中学校の在学年限は四年に短縮されていた。したがって、一中在学当時の思い出は、あの大戦争と結びついている。それでも昭和十七年と十八年の二年間は、戦時色は濃かったとはいえ、まだ学校生活も平穏で楽しい中学生活であった。

昭和十九年に入り戦線は日本内地に近づいてきた。そしてついに学徒動員となり、十九年五月から三年生以上が出動となった。四・五年生は愛知県刈谷へ、私ども三年生が片山津へ行った。いよいよ明日上級生たちの第一陣が刈谷へ出動するという最後の日に、英語の授業があった。先生は小島鴻次先生で、リーダーはウイリアム・テルの話であったと思う。先生は最後につぎのような話をされた。

「全校生徒が揃って授業をうけるのは今日で終りである。窓からはグランドの緑と大乗寺山がみえ、聞こえる音といえば先生方の授業の声と、諸君がノートをとるサラサラというペンの音だけである。こういう静かな一日のあったことを諸君はこれからも忘れないでいてほしい。」

小島先生の調子は決して悲壮なものではなく、しみじみとした調子であった。

戦争が終って何年かたってから、私は小島先生にこの最後の授業がなつかしいとお手紙を手した。先生は丁寧な返事を書いて下さったが、その中に一行英語があり、**Let bygones be bygones.** と書いてあった。

さて、われわれ三年生は片山津の矢田屋などに分宿して小松海軍航空隊の飛行場設営に従事した。金沢市内の全中等学校生徒が交替で出動し、九月には完成した。したがって現在の小松空港は、われわれの汗と涙の結晶なのである。十月からは、豆田の大和紡績に立川から疎開してきた陸軍航空工廠発動機工場に動員された。工廠は二十年四月には津幡に再疎開した。わが学年は終戦をこの津幡で迎えたのである。私自身は体をこわして家に居たので終戦の放送は、母と弟と三人で聞いた。

私どもは二十一年三月（まだ戦時特例が残っていた）、二十二年三月と二年次に分れて一中を卒業した。さらに新制移行となり金沢一高を卒業した者もある。同一学年の者が三年次に分れて卒業したということは、長い一中泉丘校史上稀有の例である。

私どもは実質二年余りしか授業を受けられなかった。そこで本校七〇年史にも、「工場動員によって形式的には進級しても学力に自信のない生徒、とくに四年生の学力不足が痛感された。」（同書、二三四頁）、と記されている。この学力不足の四年生の中から、今年は学者の芥川賞である日本学士院賞を受賞する者が出た。――柚木学君である。われわれは東京と京都と金沢で同君のなしとげた快挙を大いに祝ったのである。

（なお七〇年史には、学徒動員は十九年八月からと記されているが、これは同年五月からであったと思うので、再調査して下さい）。

ブルガリヤに出張して思う

池田　正（通信第十二回卒）

私は技術指導員として、出張する機会が多く、年間の半数は家にいないという身であります。

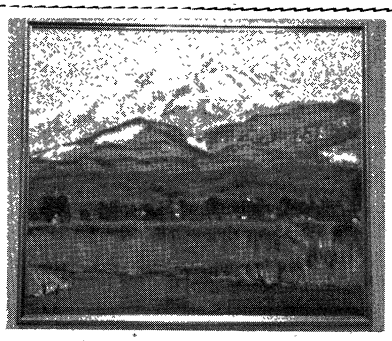
突然、プラント輸出で、ブルガリヤ最大の合繊工場建設プロジェクトの一員として出向し、当社の機械の操業・管理の指導を任命されました。それは私が一切手を添えず、男子十名、女子百二十名が不安なく作業出来るようにすることが前提となっています。

海外出張は十数回を経験しているが、今回初めて社会主義国に入ることになりました。準備期間もほとんどなく、成田発モスクワ行の便に乗った。私の他にプロジェクトの仲間が、三社三名同じ便に乗り安心したが、モスクワ着が遅れて接続の飛行機は離陸した後。全員ロシア語がわからず、本を見ながら聞きだした結果、次の便まで十二時間半待つことになった。時差の関係で食べる所がなく、空腹で待つ時間の長かった事は今でも忘れられない。

首都ソフィアに到着し、そこから小さな車で我々の目指すディミトログラード市まで二百五十キロ走り無事アパートに到着した。

先任十六名で日本人の他に、仏・西独・ベルギー各国の人達が歓迎してくれた。二年前から一度も帰っていない人も有り日本がなつかしいようで、日本の様子をいろいろ質問されながらの飲食会となった。ブルガリヤ特産の酸っぱいヨーグルトは、最初は砂糖を多く入れないと食べられなかった。酒類は豊富で東独・ブルガリヤ産のビール・赤白ワイン・コニャックが出された。中でも、ぶどうから作ったラキアと言うアルコール六十五度以上の酒を飲むように言われたが、さすがに少ししか飲めなかった。ブルガリヤ人は素朴で人なつこく農耕民族のせいか我々の計画した日程の三倍を必要とし、一日のノルマを与えると数時間のうちに仕事を終えて帰宅しようとする様子でイライラしたが、これが社会主義国の姿なのかと思える。物資不足の長い行列を見たが、話に聞いた日米大戦後の配給制度に似ているのだろう。我々の食糧も制限を受け一日二食抜きの時もあった。

観光でなく、ブルガリヤの土地に触れてみて、文章で書き表すことが出来ない体験をして、日本は本当に良い国だと思った。



白　山
桜美会員　斉藤弥吉（一中49回）

◇同窓、先輩よりの著書のご寄贈

前号に記載した同窓、先輩よりの著書のご寄贈に引き続き、今回も次の方々より、その著書のご寄贈をいただいた。

将来の夢としての一泉文庫の資として有難くいただきました。紙上をかりて厚くお礼を申し上げます。

○北村尚義氏（一中五〇回）
　地方の時代と電波メディア
○高原武臣氏（一中二七回）
　古語に遊ぶ
○根岸　巌氏（一中三一回）
　伸びよ創造性
○南　秀男氏（一中四一回）
　藤　秀璽選集　歎異鈔講讃㊦
　藤　秀璽選集　戯曲集

一泉短歌

マレーシアの旅

赤井直恭（一中三十二回卒）

窓に見るクアラの街の山と森　金沢に似ると友のいひけり（クアラルンプール、57・2・17）

鼻をつく異臭流れるゴム園で原木つたふ白液に触る（同）

椰子しげる邦人墓の夕闇にからゆきさんの碑白く光れる（シンガポール、57・2・19）

枕頭に蘭の切り花その風情さすがと思ひとくと眺めつ（ペナン、2・21）

華麗なるホテル近くにニッパ小屋この異和感をわびしと思ふ（ペナン海岸）

マラッカの海の青さよその青にむかひて黙す旅の男は（同）

砂丘の砲台を撫で暮れてゆく海に向へば時とまるごと

蛇寺のへびをたつきに暮すひとみ仏も笑む常夏の国（ペナン、2・22）

蛇寺の黄色きへびを首にまき悲鳴あげつつ写真とる娘も（同）

同窓の集い

◇関東三十二期会ひらく

大正十四年卒

金一中関東32期秋のクラス会は11月8日、横浜の三渓園で開き、左記の10人が集ってお互の健康を祝した。今回は春日力君が幹事で名残りの菊をめでつつ園内を散策の後、すぐとなりの隣花苑で開宴、往時の先生・旧友の消息を語りあい、時のたつのを忘れた。

春の会（4月7日）は泉谷君のあっせんにより江ノ島で開いたが、会場を廻り持ちで適宜に選ぶことにしているのも一興。

写真は本部均君の提供。（紅）

【出席者】中村、下村、松林、赤井、泉谷、本部、柴田、北村、相馬、春日。

（赤井直恭記）

◇「少年易老」

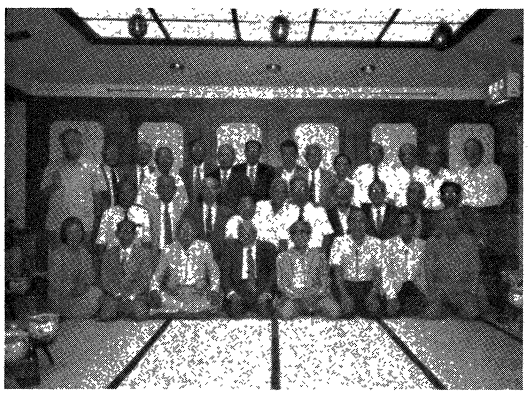
昭和三年卒「三五会」

秋風が立ちはじめた九月四日、金沢駅前のホテルニュー金沢で三五会の本年度総会が開かれた。鏑木先生がわざわざ足を運んでくださったのはまことに有難く、七十才を二才・三才・四才と過ぎた者ばかりだが一同先生にあやかり、先生に負けられぬゾと元気づいた。

地元勢はもちろん、東京から四名、兵庫一、富山一の計三〇名、その中でも不自由な足のため奥様を介添役にして安江の四郎君が東京から顔をみせたのは嬉しい風景だった。

卒業以来五四年。どの顔にもシワが寄り、年輪が刻まれてきたが、反面まるみと落つきとやすらぎが現われているようでいっそう懐かしく思われた。

「本多の森」時代に習った少年易老の一句が今現実の姿として、まざまざと眼の前にあり、「学難成」とはいえ、皆それぞれの立場で、一応人生の学をなし遂げて来たのだなァと思ったのは自分だけではなかろう。

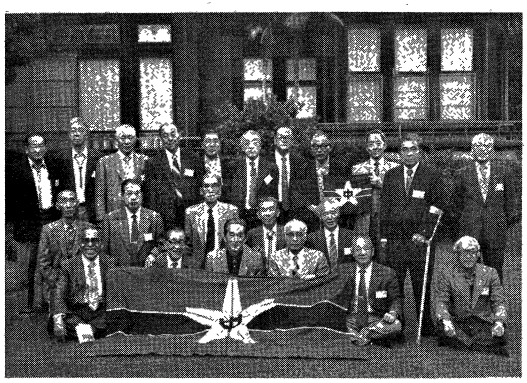


磨りへった校舎の石段をドタ靴で上がり下りした話など尽きないまま八時過ぎ散会した。（大森玄衆記）

＊因みに三五会員中現在までの物故者七〇名、現況のハッキリしている者六三名、音信のない者三一名計一六四名です。

◇六桜会東京大会（昭和六年卒）

昨年五〇周年記念大会を金沢で行ない人生の大きな節目を過ぎてホッとした。あとは一年一年を大切に生き抜く事を約束し、今年は初めて県外の伊豆熱海温泉「起雲閣」で十月廿二、廿三日の両日に渡り開催した。集る者金沢の十名を入れて総勢二十二名、何れも激動波乱の青壮年期を生き抜き風雪に堪え豊富なバラエティある経験者の集りである。本会の伝統に従って物故者八十七柱の霊に黙禱を捧げ、東京中山君、金沢加藤（俊）君の挨拶、一泉同窓会西多事務局長の近況報告の後、友田君の音頭で乾杯し開宴に入った。廿二日夕刻六時半から九時頃迄の一次会は会食会飲しつつ歌謡曲・歌曲・詩吟・小話が続出。そして九十周年を迎える母校の伝統ある豊富な日本有数の優れた校歌及び応援歌に時のたつのも忘れ、引き続き二次会に移り金沢美人論、幻滅の悲哀、古い良き時代の回想、海外事情から中国問題、エネルギー問題に移り放談白熱して止まず、更に数名の者は三次会に及び広



く世界の情勢と将来の展望を論じ、さすがに年齢の為か往時の様なアルコールの量は飲まなかったが談論風発中学時代の若い気持とその後の長い経験によって体得した知識とが交錯して、何時の間にか夜は白々と明けて来た。今回の六桜会は全く楽しい一夜であった。

翌廿三日は十時から六時間に渡り箱根スカイラインの観光をして小田原駅で解散、来年又金沢地区での再会を約して別れた。

当時の出席者は次の通り二十二名であった。

〈金沢地区〉

黒田一郎、加藤俊男、多賀太美蔵
山田栄喜知、前田又久、西多外喜次
竹内正明、永井正三、加藤外喜雄
鳥居隆二

〈関東地区〉

松崎英丸、沢田久雄、奥原政雄
酒井捨蔵、松倉　靖、松坂為雄、
宮田政雄、中山正敏、友田正雄
双佐　潔、安原二郎、小俣外世雄

（安原二郎記）

◇関東七桜会健児集う

立春の翌日、二月五日に関東七桜会健児が東京渋谷の美竹会館に集る。三年振りの集いのため久々に逢う楽しみに逸る心で集合時間前から顔を揃える。

幹事高松一吉、村上甲子太郎兄のご尽力で美竹会館が選ばれた。美竹会館は元梨本宮殿下のご邸宅跡にて広大な庭園の中に菊のご紋章の刻まれた燈籠もあり落ちついた邸宅宿舎である。

金沢の同窓メンバーにもたまにお江戸のメンバーの顔を見に来ないかとの誘いで、南為二、室賀喬兄と小生と三人で東京へと足を運んだ。

高松、村上兄に迎えられ早々にして瓜生復男、伊藤直之、伊藤春夫、池田克己、奥出美朔、越村衛一、篠原外志武、高井誠二、西出大三、前田弘、山本正治、幸村博敏、森田達の諸兄元気に顔を揃える。久しぶりの再会で積もる話に花が咲き元気に逢えた幸せを喜び合ったものの亡き学友七五兄に想いを走らせ冥福を祈った。

又一泉同窓会の現況を中心に泉ヶ丘高校改築、創立九十周年記念事業等について説明し、明五十九年十月の七桜会全国大会には在京健児も多数出席することにした。

いよいよ懇親会にうつるや金沢から持参した「どじょうのかばやき」で祝盃をあげ将に古稀をむかえんとする昔日の若桜。大いに意気揚がると共に郷里の話題でそぞろに郷愁の念深まる。宴酣になるや持参した金沢一中応援旗はお江戸の夜にひるがえる。

前田弘兄のはとバス社長就任を祝し祝盃をあげる等して時はふけて行く。

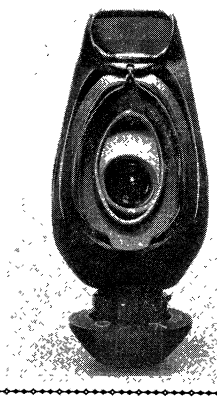
伊藤の大仏胃の手術後にてあの豪快さも今日はジュースで我慢している心中察する。

お互に健康に留意し余生を楽しく過ごそうと誓うこと切なるものがある。

我々三名と共に、越村、村上兄が共に同宿され、翌日晴天の富士を眺め一夜とはいえ懐かしい思いで次の再会を約し二人に見送られ別れる。

在京七桜会学兄のご健勝を心から祈念するのみ。

（昭和七年卒）山瀬芳男記



第三十六回二紀展
生と死へのいざない
堀　義雄

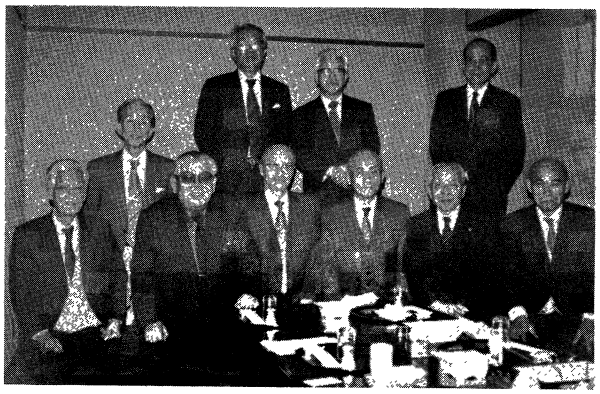
つつしみて
御代の初春
ことほぎまつる
南海

米寿とて子供心のお正月
南海

昭和五十八年正月
東京都杉並区一―六七―一九
三須武男
（一中二十回卒）

◇四十回、四十一回生の合同本多会

関西に在住する四十回、四十一回生の世話人の間に、お互いに年をとるにつれて同窓生の仲間が次第に減り淋しくなるので、今後は、合同で同窓会を開いてはどうかとの話がまとまり、その第一回が、三浦、赤崎、小泉らの世話により、十二月十三日(月)午後五時三〇分から、大阪の堂島ビルに近接する魚料理がとてもおいしい「うお万」で開かれた。出席者は、四十回生では木村繁、小林良夫、千田民夫、能木場俊吉、水落昇の五名、四十一回生では赤崎雄七郎、谷村弘、三浦繁雄、八十島健二、小泉茂吉の五名で合計十名となり、出席率はまずまずであり、盛大に行われた。



「うお万」は赤崎の息子さんが支配人をしておられ、何かと特別の配慮にあづかり、鱈の白子(俗にだだみ)や、その他色々な魚料理を味うことができ、本多の森の思い出話がついはずみ、本当に久方ぶりに旧交を温めることができた。酒もすすむ程に山中節や詩吟なども飛び出し、色紙に寄せ書きに達筆をふるい、愉快に楽しく語り合い時の経つのもつい忘れ、これを機会に年二回程度の合同本多会を開くことを約し散会した。

(小泉茂吉記)

◇一中四十二期生十桜会総会

(昭和十年卒)

毎年恒例の第十一回十桜会総会を去る十月十、十一日の連休日、秋色深まる山中温泉「よしのや」で開催した。

後藤先生御夫妻、塚野先生、藤田先生の御来駕を得て、同伴夫人を含め総員五〇名出席。梶川欽一郎会長の歓迎の挨拶、続いて全国会員の動勢を報告、幸い本年は一人も他界がなかった事を喜び合った。(但し病気加療中の者二十数名あり)

次に創立九〇周年事業の概要を説明、案件の初代富田校長の胸像復元は同期の堀義雄兄が依頼をうけて目下製作に専念しているので、特に関東在住の諸君は折を見て彼のアトリエを訪ねて励ましてくれる様お願いした。

尚関西地区の福塚賢二兄より緊急動議あり、従来の関東・関西・北陸の三地区持廻りの世話役は来年より関東と北陸で交替に世話をすることに決議された。(来年は関東、十月十四、十五日の予定)

続いて懇親会に入り、先ず恩師三先生の御挨拶、古沢英雄関東代表の乾杯の音頭で開宴、白髪、禿頭の老友も桜章健児の往時にもどって大いに意気上り、校歌・応援歌を斉唱し、沖野永保関西代表の万才三唱で閉宴した。

翌日朝食時、明大教授西村忠恭畏友の「楽しく安直な外国旅行」の奨め、と軍事評論家山崎太喜男畏友の「日本防衛の裏話」を楽しく聞き、午前十時頃来年の再会を約して散会した。

(諸江記)

◇関西一中四十三回 早春の集い

昭和十一年卒の関西在住者の五十八年度の会合は、三月十日大阪梅田堂島の「銀平」で、活の剃し身を肴に盃を重ね、旧師の思い出話や諸友の消息など話もはずみ、早春の一夜を楽しく親交を深めた。中村(入院)加茂野(検査)で欠席となったのが残念であった。

出席者　上田三男、北中善雄、竹内豊八、長岡寛厚、中川(籾谷)憲治、水上慎、真館一郎、前田藤治

(長岡寛厚記)

◇一中四十三回卒片山津集会

本多の森で育った桜章健男児の卒業四十六周年会が、去る九月十八日片山津温泉〝あたかや佳水郷〟で行なわれ関東・関西よりも各五名ずつ参加し、恩師三名を囲み三十名が楽しく一堂に会した。

例年参加でお馴染の宮沢・藤田先生に加え本年は大阪より後藤先生がご夫人同伴で駈せ参ぜられ、アダ名のサイレンの大声で乾盃の音頭取りで賑わい、四十六年振りの先生との再会で一層懐古談にも花が咲いた。最後は校歌・応援歌で残り少い青春の血を燃え立たせ、各部屋で深夜迄懇談も賑わい、又明年の会合を約し散会した。

入学時二〇〇名の仲間も卒業時には一五〇名余りに減り、四十六年経った現在では現存者一〇九名（内住所不明者十一名）死亡者四十二名の現況です。

（長岡記）

〈出席者〉

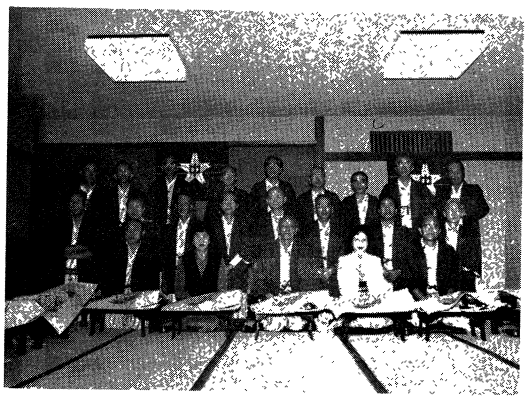
浅井利一、浅野実、栗倉武、稲葉登機、牛村宏、上田三男、加茂野弘、黒嶋喜久雄、佐野将之、島誠夫、高辻秀時、谷一郎、谷山巌、竹内幸男、竹内貴八、鳥畠甚三、長岡寛厚、中林二郎、中村於外男、中本順一、藤平竜吉、朴木茂之、前川章栄、森山隆平、東侃、山田省一、吉田明久。

◇金沢一中第四十七期 還暦同窓会開く

十月十六日㈯夕方、山中温泉「八松苑」にて金沢一中第四十七期還暦同窓会が開かれた。

午後五時半関東、関西、中京、北陸から浦田先生以下二十三名が集り、先ず同期生で北陸病院の西野院長から「還暦後の健康について」と題して約三十分間、同期生ならではの良い話をみんな真剣になって聞いた。その後、過ぎし六十年の人生についてゆっくり秋の夜長を語り明かし、声高らかに一中校歌を全員で歌い四十数年前の一中時代の青春の姿が再現された「ひととき」であった。

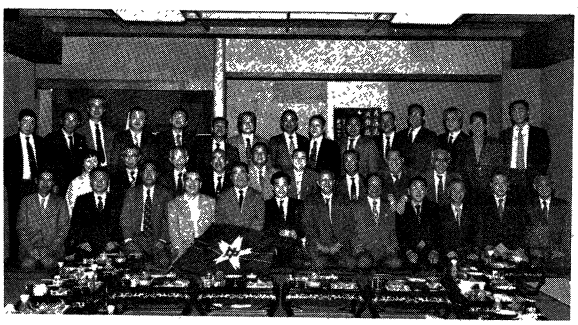
（大蔵記）



◇一桜会（五十一回卒）同窓会

一年八ヶ月振りに同窓会開催の案内を受け、昭和五十七年十一月十六日午後六時、兼六園横の兼見御亭に参集しました。定刻近く続々と昔懐しい顔・顔・顔が集って来る。久し振りに出席したものは最初名前と顔が一致せず、隣の者に「おいあれ誰やったいや」と聞いている。「太田の一雄や」「ありゃ中山のタップや」等々ワイ〳〵ガヤ〳〵誠に賑やかなこと此の上ない。「おー久し振りやな」「えらい白なったなあ」と夫々挨拶が交換されている。定刻十分過ぎ浦田チョッカク先生始め出席者三十五名がほぼ揃ったところで宴会場に移り、くじ引きで定められた座席につく。先ず最初に幹事の佐野君の音頭により、物故者二十五名の冥福を祈り黙禱を捧げる。引き続き同窓会会長である金沢商工会議所会頭宮太郎君のユーモアたっぷりの挨拶があり、浦田先生より昔金沢一中で教鞭を取ったことを非常に誇りに思ったものであるから、卒業生である諸君も大いに自信と誇りを持てとの祝辞を頂き、小児麻痺の研究で昨年は金沢市文化勲章、本年は厚生大臣賞に輝やいた辻成人君の音頭で乾盃し、愈々開宴となる。

宴の半ば佐野君より去る十月一日東京在住者の同窓会に出席した報告やら、住所不詳者十五名の探索依頼やらがありました。



遅刻者も集まり全員が揃ったところで記念写真に移り、幹事の演出よろしく、バックに一中応援旗が飾られ昔の美少年達の良い写真が撮られ、本当に良い記念写真ができ上りました。宴酣に及ぶや応援団長の吉岡のクマさんの旗振りで「校歌」や「南征の調」を兼六園の夜空に響けとばかりに蛮声を張り上げて大いにストレスを解消したのであります。

メートルが上がるにつれ、最初は久し振りに会った気がねからか、何々君何々さんと云っていたのが、参議院議員の先生様をつかまえてワン

公だとか、博士先生をゴットン・オジョウと昔通りのアダ名で呼び合い、肩叩き合って旧交を暖め、非常に和やかな雰囲気を醸し出しておりました。

四十年程昔学業を共にした気心の知れた仲間程良いものはありません。何十年振りに会っても直ぐにとけ込める友情は、何にも変え難い尊いものがあるような気がします。

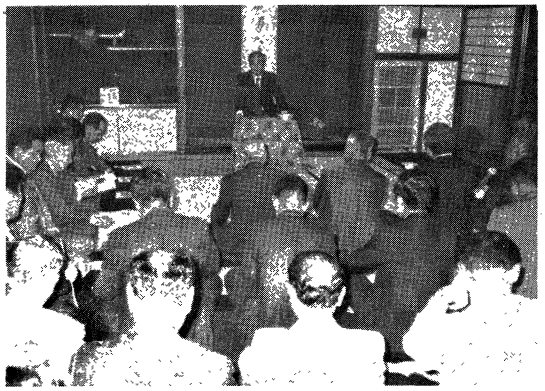
名残りを惜しみ、お互いの健康を祈りながら、次回は金沢一中創立九十周年を記念して再会することを約束し、盛会裡に幕を閉じました。

（佐野　豊記）

◇一中五十三回生研修会

われわれ一中五十三回生は、同期の「清風荘」・「三竹屋」と会場を持ち回りで、年一度の会う瀬を楽しんでいます。また、数年前から、懇親会に先立って、実業界、官界等の第一線で活躍している会員に講演をお願いする、いわゆる研修会を行っています。今回は、海上保安庁長官の永井洋氏から、海上保安庁の業務内容や日本海運業界の実態等、二〇〇海里時代を迎えて新しい海洋の秩序づくりが急がれている現状につき、興味あるお話しを拝聴することができ、見聞を広めた次第です。今年度は去る十月二十六日清風荘を会場に三十五名が集まりました。今回もまた卒業以来はじめて参加する珍しい顔もあり、応援歌を高唱する頃には会は最高潮に達しました。写真は研修会のスナップです。卒業後三十七年、うしろ頭の光りが気になります。

（高川記）



して大いに結束を固めての意気をあげた。

（杉野記）

○関西泉寿会（泉十期卒）は十一月二十二日㈰、梅田の新阪急ホテルに於て、松川先生の御臨席をいただき再会のひとときを過した。

関西地区在住者三十数名に関東泉寿会と金沢からも出席し、盛大であった。

（世話人　鶴来紘一）

○関東泉寿会（泉十期卒）恒例の新年会を一月二十三日㈰渋谷東急インに於て開催。香村先生、浜名先生を囲んで五十数名が楽しいひとときを過した。

（世話人　長森敏泰）

◇泉寿会（泉十期卒）支部大会

卒業二十五周年記念大会の開催を目前にひかえて、愈々その団結をかためるべく、昨年六月の泉寿会大会に引きつづき、関西泉寿会と関東泉寿会にては夫々次の通り総会を開催

◇第四回緑窓会開催〝泉丘高校第十二期生の集い〟

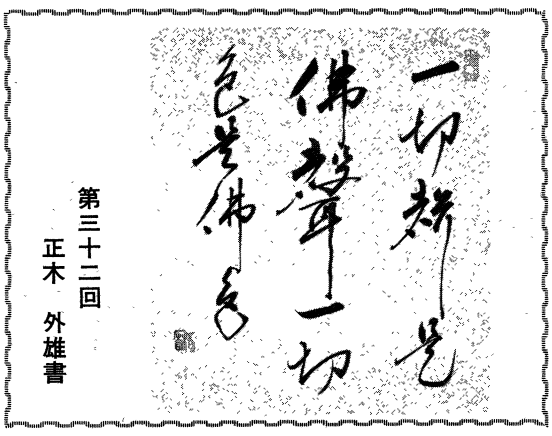
例年、お盆休みを利用して開催していた泉十二期生の集いは、母校九十周年記念事業の一環である同窓会名簿の作成の関係上、急拠この十一月二十日㈯午後五時から〝ホリデイ・インカナザワ〟に於て開催した。

時期的な懸念もあったが諸先生方十四名、同窓会より西多事務局長と総勢九十余名が一堂に会した。同窓生の中には遠く新潟、奈良、滋賀、名古屋とはるばる足を運んでくれた。母校の近況と同窓会の活動報告のあと、ユーモアたっぷりの名司会を泉匡隆さんが受けもち、在学時代に流行した歌をバックに三時間が夢の様に過ぎた。

校歌と万歳三唱を最後とし、殆ど全員が二次会と称して夜の片町へと流れ出して、年令を忘れディスコにカラオケにと二十数年前の青春時代に戻った様な一夜でした。

末筆となりましたが、我々十二期生の集りに〝緑窓会〟と名付けて下さいましたのは往年の名校長として名高い山本外吉校長です。

（梅谷和子記）



第三十二回
正木　外雄書

同窓会通信

◇本部同窓会総会

本部同窓会総会が、例年通り十月十五日の母校創立記念日に開催された。心配された天候も快晴に恵まれ、厳霜碑前にかざられた供物と一泉同窓会ののぼり旗も秋風になびき厳粛な慰霊祭が催された。遺族を混じえた二十五名がこれに参列、玉串を奉呈し式を終えた。

総会は午後六時、市内のニューグランドホテルを会場とし、約一六〇名の会員が一堂に会した。五十九年に迎える母校創立九十周年行事についての話題を中心に、益々結束を固めようとの宮太郎会長の挨拶に始まり、大高校長の母校の近況、校舎の新築現況についての報告があった。尚、事務局よりの会計決算報告があり全員の承認を得て祝宴に移った。

いつもながらの同窓会風景にて台上にて唄う者、グループの合唱等、次から次へとの余興に秋の一ときを楽しく過した。

本年の参加者には多くの若い女性の姿も見られ、会場には和やかな風景が展開され、例年にない雰囲気が流れた感があった。（西多記）

◇関東一泉同窓会総会ひらく

例年秋に開催される関東一泉会総会が時折り小雨の降る九月三十日、会場も昨年と同じ九段会館ホールにて催された。

集う会員は、大正二年卒業の大先輩谷恵吉郎氏をはじめ、二百余名の会員が一堂に集合した。大正十四年卒業の下村節義先輩の開会宣言に続き、前副会長故瓜生順良氏への黙禱を捧げご冥福を祈る。

鏑木政岐会長の元気な挨拶のあと金沢の同窓会本部より参加した楠禎一郎教頭、垣内謹治教諭、西多外喜次事務局長より夫々母校の現況と五十九年に迎える母校創立九十周年事業及び校舎の新築完成祝賀についての報告が行われた。

これより谷先輩の音頭による乾盃で開宴。同じ学窓に育った者等の集い、談笑風発、先輩後輩が一つになっての宴は、他の会合には見られぬ和やかな風景をかもしだした。

久しく聞けなかった懐かしい金沢弁が自然に飛び出し故郷に帰ったかの感が会場一杯に溢れる光景となった。

宴が終り散会とはなったが、同期の連中にはまだ名残りが尽きぬことか三々五々それぞれのグループに分れ第二次会へと向った。

尚、この席上にて欠員となった副会長には、昭和二年卒の浦茂氏が選ばれ「お役に立つなら喜こんでお引受けします」との心強いご挨拶をいただいた。今後愈々関東一泉同窓会は活発な活動が期待されることと思う。（西多記）

石川県庁一泉会ひらく

石川県庁一泉同窓会では、再出発後の第三回総会が去る十二月一日、金沢市清川町のセンチュリーホテルを会場として開かれた。

特別会員の矢田富雄県議を始め、旧金沢一中、泉丘出身の県議会議員六名を中心に総勢一三〇名が一堂に会した。

母校より大高校長、垣内、高川の両教諭、同窓会本部より西多事務局長が出席した。

まず本年度会長に選ばれた井幡清生氏（一中五二回）が立っての挨拶にはじまり、大高泉丘高校々長が、来年予定されている母校の創立九十周年記念事業の計画と、更に五十七年度中に完成を予想される校舎の完成祝賀に付いての記念行事を目下検討中にて、その協力方を懇請された。

続いて幹事よりの年間行事報告、会計決算の報告があり祝宴に移った。

矢田富雄県議の乾盃の音頭とともに開宴。この時中西県知事も、多忙の中をお祝いに馳せ参じ、一泉会の盛会に驚かれながら祝辞を述べられ、会場は一段となごやかな同窓会風景が演ぜられた。

旧金沢一中、泉丘の校歌の交歓、賑やかな雰囲気の中で午後八時過ぎ再会を期して散会した。

◇東海一泉同窓会
五十七年度総会開く

初秋の九月十九日、五十七年度東海一泉会の総会が雨降る弥生会館を会場として開かれた。

前田名誉会長の元気なお顔を中心に二十七名の会員が参集した。金沢の本部からは竹田副会長、西多事務局長、学校より大高校長が出席した。

湯谷会長の開会の辞につづき、竹田副会長より同窓会の近況と次に迎える創立九十周年事業についての説明と共に挨拶をなす。続いて幹事役の沖野永保氏より東海支部の現況について報告があり宴に移った。

宴は名大教授の横越英一氏のユーモアたっぷりの司会にて、出席全員の自己紹介と愉快な往時の想い出話をまじえてのスピーチ。手品を上手にこなす藤田さん、出身小学校の芳斉町小学校の校歌を歌い出す平岸博氏等で盛会をきわめた。最後は竹内正氏の音頭で再会をちかい万歳三唱で解散した。

桜美会報告

桜美会は、同窓会各位の深い御理解と絶大なる御後援を賜わり、十周年記念展を大和デパートにて盛大に開催し、十月十五日の一泉同窓会に於て感謝の報告をさせていただきました。今年八十二歳になられる宮沢外与次先生は益々御壮健にあらせられ、目下二十周年記念展をめざして精進しております。

さて昭和四十五年発足し昭和四十八年十一月第一回の美術展を開催してより、ここに十回展を開催出来ましたことを、会員一同悦んでおります。以下報告をさせていただきます。

㈠ 第十回桜美会展のもよう

今回は創立十周年記念展と致し、金沢市片町大和デパートにて十月七日より十二日迄開催し、実に三、五〇〇名の方に御高覧いただきました。初の試みとして十回展にあやかり、作品の大きさをすべて十号に統一し鑑賞しやすいように心がけました。これが非常に好評でした。出品者数七十五名、出品点数百点でした。

㈡ 記念パーティのこと

美術展開催中の十月九日午後五時より大和七階大食堂を借り切り、招待者を含め五十名の御出席をいただき、十周年記念パーティを催しました。当日はわざわざ東京、新潟、富山、福井の遠隔の地より多数参加下さり、主催者望外の悦びでした。

㈢ 記念品のこと

宮沢先生デザインの記念ペンダントをもとに棒タイとし、桐箱に納めたものを引出物として進呈しました。又、記念出版した小冊子を会員にもれなく送付しました。

ちなみに記念誌は四十四頁ですが、目玉として山森青硯先生の論文「郷土に於ける初期洋画の研究（八十枚索引付）を飾らせていただき会員諸氏の寄稿八編、名簿よりなっております。これをみれば桜美会の歴史がわかるように工夫されてあります。

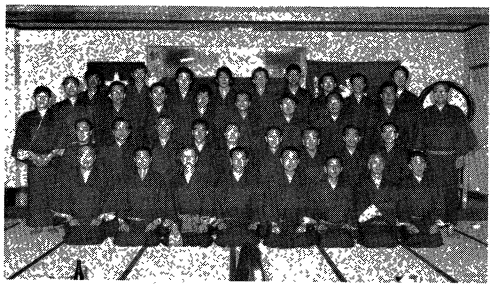
㈣ 陣屋茶会のこと

桜美会十周年展の慰労を兼ねて会員本多政一氏の御好意により、本多蔵品館に於て陣屋茶会を十月三十一日に催しました。会場を陣屋風にしつらえ、茶碗は銘々が持参し、茶道師範蓬沢静子母娘のお点前にて秋の一日をすごしました。終了後本多男製作の町立茶会の映画を鑑賞致しました。

以上桜美会の模様をお知らせしました。尚入会希望の方は先生又は事務局まで御一報下さい。

（斉藤弥吉）

北陸電力一泉会第二十回総会



このところ二年に一度のペースで開かれている北陸電力一泉会総会は、四月十七日片山津の北陸グランドホテルに北陸三県から高瀬常務以下三九名が参集して盛大に行われた。

今回で二十回目という輝かしい記録を樹立した訳で、会員数も退職後の残留希望者を含め六一名を数えている。一中卒十七名に対し、泉丘卒は四四名の構成となっており、最近若い層が着実に増えているのは、会の発展にとって喜ばしい次第である。

総会は幹事の一般報告に始まり、母校の改築についての報告もなされた。総会の後盃を傾けながら自己紹介に移ると、一中卒の多くの会員から、本多町の旧校舎から富樫の新校舎に移転した当時の懐かしい思い出話が次々と披露された。取壊される校舎で学んだ者が殆どで、旧制の一中、併設中学校（新制）、金沢一高、泉丘と戦後の教育改革を反映して多彩であるが、時の移り変りの早さを身に泌みて感じるとともに、一沫のさびしさを禁じ得なかった。

酔いもまわって恒例の応援歌の合唱が始まると、数の上では少数派の筈の一中卒の意気は高く、肩を組み我を忘れて声高らかに歌い続けた。最後に母校と会の発展を祈念するとともに、多難な電力会社の前途に雄々しく立ち向うことを誓って、意義ある会合の幕を閉じた。

（徳田春吉記）

金沢市役所一泉会名簿まとまる

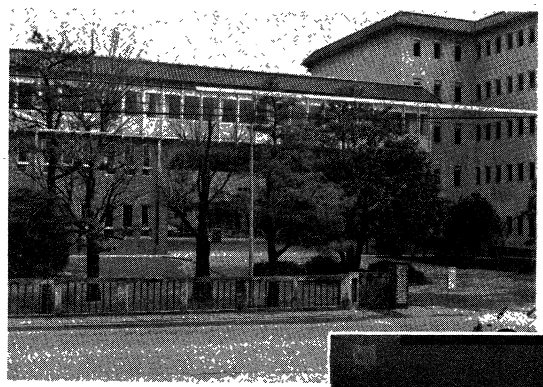
既に発足し、三年前より年一回の総会を開催するまでに至っている石川県庁一泉同窓会に刺激されてか、このたび金沢市役所内にもその気運が高まり、この程その第一段階として庁舎内の旧金沢一中、泉丘出身者の名簿が出来上った。それによると旧金沢一中卒業生は三〇名、泉丘高校卒業生は一九〇名の計二二〇名をかぞえた。

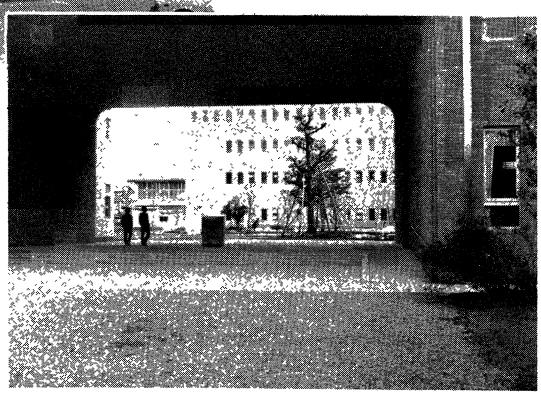
旧金沢一中卒業生の中には高倉健次教育長、中川三津夫収入役、尾戸嘉博助役を始め各部課長の名が連なっている。

今後、若い泉丘卒業の有志によって市役所一泉会が組織され、これからの活動が期待される。

新校舎の完成

この程、新学期を迎えて改装中の泉丘校舎が講堂の新築を残すのみとしてその全容が完成した。正面玄関の管理棟につづく五階建の各教室棟は泉野原頭の偉容として出現した。





校舎内の設備は県内随一とされ、各科研究室をはじめ各施設が具えられた名実ともに名門校として新発足することとなった。

鏑木勢岐先生の死を悼む

尾山神社・石川護国神社宮司の鏑木勢岐先生が、去る三月二十六日、肺炎のため県立中央病院にて死去されました。

先生は旧金沢一中（第22回卒）を経て神宮皇学館を卒業。二十一才で母校の教壇に立ち、戦後一中が泉丘高校になったあとも引き続き教頭として、大正八年以来昭和三十三年の定年退職まで務められた。専門は漢学だったが、学識が広く郷土の豪商銭屋五兵衛の研究では他の追随を許さず随一といわれた。

考古学研究では石川県の大先達で、石川県考古学研究会を創設し初代会長になられた。また先生は早くから史跡名勝の調査研究、埋蔵文化財の発掘、調査、指導につくされ県内の遺跡遺跡の多くは先生の指導によるところが多い。

先生の著書には「銭屋五兵衛の研究」「雪流藻汐草」「金沢市史現代篇」などがある。

ここにつつしんでご冥福を祈ります。

五十七年度 同窓会々費を納入の期

（58・3調）

回	委員	回	委員
23	林　惣次郎	53	高川　義一
25	米沢　喜六	54	矢来　正
26	花岡　虎三	55	川北　篤
27	鏑木　政岐	一高	吉竹　毎謳
31	村山勝次郎	泉2	普神　貴行
32	吉田　直民	3	徳久　和夫
33	藤田　誠一	4	正村　建三
34	紙安栄次郎	5	西尾　稔
35	市島亀太郎	6	柴野常太郎
36	笹井　富雄	7	水谷　昭
37	黒田　辰夫	8	福田　太睦
38	加藤　俊男	9	蔵田　武男
39	山瀬　芳男	10	杉野　芳宏
40	小堀　宏	11	井波　豊英
41	牧沢　善二	12	泉　匡隆
42	諸江　敏夫	13	本野　雅隆
43	高辻　秀時	14	磯野　浩
44	吉村　正信	15	成瀬　巌
45	石崎　皓三	16	広瀬　靖久
46	太田　定夫	17	福田　雅幸
47	大蔵　吉夫	18	柿本　自如
49	斎藤　弥吉	25	中村由紀夫
50	西坂弥三郎	26	山田　信二
51	佐野　豊	通	釜谷　鉄山
52	寺窪　三郎	通	木村　登

以上の各期から本年度一泉同窓会の運営資金として金一万円の会費の納入をいただきました。当会の事情ご了察の上、今後ともご協力のほどをお願い申します。（事務局）

―― 国公立二十二大学 合格状況が発表される ――

ことしの国公立大学合格者発表が公表された。増加したのは地元の金大、金沢美大、富山大と東大、神戸大だけで京大、東北大などへの合格者が減少している。

泉丘校では、金沢大へは昨年とほぼ同数であったが京都大で四名、大阪大で二名、東工大で三名、神戸大で四名と昨年を上廻った。

全体的にみて国公立敬遠の世相がうかがえる。

石川県内高校別の主な国公立大学合格者数（3月22日北国新聞社調べ）

	金大	富山大	福井大	金沢美大	富山医大	福井医大	東大	京大	一橋大	大阪大	名古屋大	横浜国大	神戸大	北大	東北大	新潟大	筑波大	静岡大	お茶の水大	奈良女大	千葉大	信州大
金大附	26	0	0	0	1	0	28	7	4	5	1	1	1	0	4	2	1	0	1	2	1	0
泉丘	128	8	0	3	4	3	6	12	0	10	8	1	8	3	2	1	6	2	0	0	3	1
小松	106	29	8	1	2	3	3	4	3	3	4	5	5	1	1	3	0	1	0	0	3	3
二水	78	22	4	4	4	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	7	1	1	0	1	0	1
七尾	49	18	1	0	0	0	3	0	0	2	0	1	0	0	0	4	1	1	0	0	0	0
羽咋	39	14	1	3	0	0	1	2	0	2	0	0	2	0	0	4	5	3	0	0	0	1
桜丘	36	22	0	6	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	3	1	0	0	0	1	1
錦丘	25	25	0	11	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0
大聖寺	19	9	9	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	1	0	0	0	1	1
星稜	11	6	7	4	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
飯田	8	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金沢西	7	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
輪島	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
門前	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
小松明峰	2	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
寺井	1	4	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
穴水	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北陸学院	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金沢女子	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
県工	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
松任	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
向陽	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宇出津	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
輪島実	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
富来	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
加賀	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
金沢	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
昨年比	+29	+9	−13	+11	−5	−1	+9	−4	−7	−4	−4	−3	+5	−6	−14	−14	0	−1	−8	−1	−1	−
計	541	176	35	49	12	6	42	26	7	22	13	15	19	8	7	33	21	8	2	3	8	9

あとがき

同窓各位のご支援によって会誌一泉の第七号の発行ができました。皆様から寄せられた原稿をもとにヤット編集を終えてホッとした態です。

このみちに不馴れと、素人と重なって、全体を通じて不備の面が多々あることと思います。どうぞお気付きの点をご教示下さると共に、この同窓会々誌が将来とも発行が続けられるよう絶大のご協力をお願い申します。

（西多記）